

六花
4



2019

りっかはいくかい

鎮 別れ 山田六甲

弁慶の硯へ花の影五輪

倒木を春ストローヴにくべにけり

中天に枝交しあひ夜の梅

泥酔のごとくインフルエンザかな

風邪の熱退いて眠りに落つる月

夜の梅喜住きすみの里へ越えにけり

膝まくらするは桜の気分かな

雪解の道をいくたび滑りしよ

夢醒めのごとくざわめき花の昼

薔薇の芽を指して見返り美人かな

空三分余白六分の桜かな

寂しいと花に抱き合ふ仏かな

天蓋に近づいてゐる山桜

橋渡る雪解の響き踏みながら

松下幸恵さん

昨日まで冬だったのに花となる

遠藤若狭男さん

俳縁の雪浅からず種の浜

「狩」時代の仲間だった遠藤若狭男さんが平成三十年十二月十六日に亡くなった。昔、狩行先生を批判した坪内稔典の一文を「六花」に掲載してもよいか随分迷って若狭男さんに相談したら、「先生はそのような心の狭い人ではない」と断言してくれた。しかしそのことはのち大問題になったが、若狭男さんは一度も言い訳をしなかった。狩行先生が、大阪に来られた時、有山八州彦・中村房枝同席の食事をした。その食事を六甲がお支払いすることです。「水に流そう」と仰ってくださいました。だが、周囲の人たちの意見が強かったのか、六甲は「狩」を黙って退くことにしたら、先生から、はがきで、「出句は？」といただいたまま、お断りもせず「狩」を退いた。その後、俳壇の付度か六甲はいろいろ無視されたが、若狭男さんは陰で応援してくれた。その若狭男さんの故郷に昨年は五度も訪れているのも何か深い縁があったのだろうか。「若狭」を立ち上げ元気になったのかと思ひ、亡くなることなど思ひもよらなかつたのでショックであった。今年の通題を鎮魂の「鎮」としたのである。

静止画のごとき海峡初御空
蓮枯れて風に応ふる術のなし
産土に笑ひ講あり年明くる
たたみたる一膳飯屋かざり松
初鏡うしろ姿の母になる
回し抱く嬰のけり足初笑
亡き夫の客を待ちある三日かな
立つ湯気に口を尖らせ七日粥
さざなみに寒夕焼の流れくる
淑氣満つ五葉の松の源氏寺

金泥の鶴のはばたく雑煮椀
ぬかるみの踏み場をさがす恵方道
妻留守のいちにち寒き厨かな
踏切を足踏みで待つ寒土用
波さわぎ葉づれにはかに野水仙
枯尾花そよぐちからの残りたる
出てゆきし猫すぐ戻る雪催
冬うららかに縁側に猫眠り
焼芋や戦時はいつもすきつ腹
底深く鯉ひつそりと春を待つ

瓢水の句碑のあたたか大旦

廣畑 育子

ひょうすいのくひのあたたかおあした ひろはたいくこ

風の無きオリオン仰ぎ除夜詣
瓢水の句碑のあたたか大旦
獅子舞や子の泣き声をひとかぶり
道標を巡りわが町初歩き
放つ矢に枯葉ひとひら落ちにけり
夕近くなりて御開き女正月

瓢水とは主宰の憧れ滝瓢水のこと。兵庫県加古川市別府宝蔵寺に「浜までは海女も蓑着る時雨かな」の句碑があり、瓢水の有名な句、「手に取るなやはり野におけれんげ草」は俳句を超越してことわざのように人口に膾炙している。また「さればとて石に蒲団もかけられず」と、母の死に目に会えなかった放蕩息子の悔いの見本のような句も残している。その句碑に蒲団ではないが元日の朝日が当たつてあたたかさうじやあないの、と史実を超えて詠んで挨拶したのだ。「句碑」と「悔ひ」が底辺で響き合っている見事な挨拶である。

雪卿集 せつけいしゅう

永田万年青

藤生不二男

七草の一草残しぬる子かな
一葉のはがれ落ちゆく冬木かな
小豆粥懐しき味頂戴す
歳晩の事なく暮れてゆきにけり
札を打つ音弾けをり花かるた
諦念といふにはあらず小晦日
初風呂や妻の呼びぬる声のして
馬鹿言うてひと日過ぎけりちやんちやんこ
冬の芽を見つめてぬたる老二人
そそぎたる硯に青き寒の水
冬薔薇一輪にしてきらめける
父祖眠る墓域の見えて初山河
大木を絡めてぬたる冬の蔦
元日の空を引きつぐ二日かな
冬うらら立てたる杖の又倒る
その辺り影のおよばず福寿草

志方章子

冬帽子脱げば母似と言はれけり
年の瀬や料理上手の母に似ず
暁の寒月光に打たれけり
寒卵産みしばかりを父に割る
初鴉いつもの間延びしたる声
年忘歌も歌はず帰りけり
百年に手の届く木の冬芽かな
笹鳴や君聞き我に聞こえざり

升田ヤス子

年の瀬やまつすぐに来る網代笠
巫女咲かす柔肌色の餅の花
音調は青年のもの除夜の鐘
燠白く篝籠あり年立てり
ロンドンに転勤すると初電話
昼月をゆらゆら消して宮とんど
大とんど少し離れて風の渦
凧うなる高みにありぬ石舞台

谷口 一献

住田千代子

初空に画竜点睛紅を点す
この星の自転ゆるりと今朝の空
初日射す酒蔵に風留まれり
酒蔵の深き廟に日脚伸ぶ
臘梅の一輪の香の消え失せず
さり気ない寒中見舞に一句添へ
濡れ羽色見せて羽ばたく初鴉
しやんしやんと舞ふ巫女の手に風花す

裸木の夜風に泣いてをりにけり
これ和室これは洋間と新暦
雑草の輝いてゐるお正月
読初は黄色の帯の我が句集
初転びして良きことのある予感
一番にあがるは淋し絵双六
鳥かごの餌の青くあり薺粥
伸ばす手を欺いて風消えにけり

善野 行

枯藪の茨したたか刺しにけり
ひと鋸にゆつくり傾ぐ冬木かな
繭の実に高々とある初御空
だらだらと飲むが家風やお元日
したり顔して電柱に初鴉
福原に酒肴よろしき三日かな
一抹のさびしさもはや七日粥
水仙のほふ辺りの夜の底

出口 誠

うろうろと鳩の視線の冬の庭
りんとして休んでをりぬ冬の鳩
冬の鳩庭の一部となりけり
霜焼けが指の半分占めてをり
大寒のパソコン開けてアニメ見る
大寒やトイレの床のひび割れて
大寒や風呂場の壁のひび割れて
大寒に「うるさい！」の声ひびきをり

雪樹集

廣畑 育子

餅だけは喰うてごろ寝の漢かな

七種粥作つてくれる人のゐて

風の無きオリオン仰ぎ除夜詣

風に乗り餅つき会のざわめきが

瓢水の句碑のあたたか大旦

花札の好きな御方のおつきあひ

獅子舞や子の泣き声をひとかぶり

年賀状年々減つて来てをりぬ

道標を巡りわが町初歩き

峠越野菊の香り充ちてをり

放つ矢に枯葉ひとひら落ちにけり

平居 滯子

夕近くなりて御開き女正月

注連飾る藁の匂ひの愛ほしく

赤松有馬守破天龍正義

中国の剪紙目出度く年迎ふ

お互の宗旨を問はず初詣

鼻水で句帳を汚す明石城

箸紙に姉も己が名筆太に

臘梅の家に臘梅咲いてをり

髪飾り触れ合ふことも初茶の湯

延川五十昭

七草の揃はぬ粥を塗椀に

初春や一刀彫の猪飾

田尻 勝子

鏡餅ひび八方に吉日かな

年初め携帯電話の熱帯びて

石垣の紅一点の落椿

四時起きの祖母の告げ来る銀世界

廃屋の今年も咲きし白椿

診察の名前書くのがお書き初め

手折りたる乙女椿をもらひけり

ふつふつとすすなすすしろかゆのこゑ

人磨呂に椿の花をたむけけり

六^り花^か集^し

4月到着順

大内 幸子

バスに乗り作用の朝霧深くなる
信号に手袋落ちて見ぬふりす
鉢植を納屋へ引きずり暮早し
年の瀬の整理のつかぬ机上かな
立ち止まる二度桜てふ城下町

江見 巖

師走来る再建に時かかる寺
母の手の櫛にかなはぬ木の葉髪
耳当てて冬木の命測りけり
出口より出て行く納屋の柿落葉
退院の数へし母の年惜しむ

蜩雪譚

山田六甲



出口 誠
うろろると鳩の視線の冬の庭

冬の庭に下りたつて歩く鳩はきよ
きよると見回す。その目はおそらく空
腹を満たす何かがないかと探している
のである。食べ物不足する端境期

でもあるから鳩にとつて死活問題な
だ。以前にも言ったが、動物の行動は
食物を探すことに一日を費やし、繁殖
するための行動にエネルギーを使う。
人間のように悩まないから彼らは幸せ
なのだ、と姜尚中さんは
言う。(これ以前にも書いた)。

赤松有馬守破天龍正義
餅だけは喰うてごろ寝の漢かな

正月の句だろうか。賀客もなし、年
賀に行くでなし身動きの取れない独身
男は、一応三が日だから餅くらいは食
べて、寝正月と決め込んだ。「ふて寝」
としなかったのが救いでもあるように
思う。

平居 滯子
注連飾る藁の匂ひの愛ほしく

愛おしいという言葉は曲者で、すんな
りとしめ飾りの藁の匂いが愛おしいの
でなく、何かと結び付いた愛おしさで
あるにちがいない。想像するに、おそ
らく愛する人としめ飾りを一緒に飾つ
た幸せの記憶の匂いであるのだろう。
普段は幸せのことを忘れたかのように
暮らしていても、このような場面では
強烈に愛の匂いが蘇るのである。